

就職難・偏見越え「理学療法士に」

「覚せい剤のせいです」とうまいかなかった。高校を出て福祉の道に進みたい」。薬物依存者が社会復帰を目指すNPO法人・三重ダルク（津市）の施設で共同生活を送る男性（三）がこの春、三重県内の高校に入学する。理学療法士になることを夢見て、高校生活と薬物依存症のリハビリの両立をスタートさせる。

三重 31歳の依存男性

仲間からアキラと呼ぶ。客の暴力団員に覚せいられる男性は「簡単にい剤を勧められた。そのやめられると思った後、十年間も覚せいど甘かった」と振り返。剤を手放せず、警察に。十九歳の時、勤務 三度逮捕された。先のガソリンスタンド アキラさんを薬物に



高校の合格通知を見つめるアキラさん＝津市で（一部画像修正）

「何で勉強ができないんだ」と責めた。「反発のため、まず高校に進学することを決めた。アキラさんは学業と並行し、ダルクのリハビリを続ける。「両立が大変なのは分かっている。今は自分で選んだ道へ進むことへの期待が大きい」と話し、存者への偏見もあり、職探しは至難。悩んでいると、ダルクの先輩から「学校へ進むか資格を取ったらどうか」と勧められた。家庭に居場所のなかったアキラさんが唯一心を許したのが祖父。家族と絶縁状態の今、生きているかどうかさえ分らないが、祖父の顔を思い浮かべ、「お年寄りを助ける仕事をしたい」と、病院でリハビリを助ける理学療法士を目指すことにした。中学卒業後、自動車の専門学校をすぐに辞めてしまっ

社会復帰の壁高く

「犯罪者」のレッテルをはられた元薬物依存者は、社会復帰を目指そうとしても偏見にさらされ、大きなハンディを抱えている。全国に施設があるダルクは回復後もスタッフとして施設に残る人が多い。元依存者だった三重ダルク代表の市川岳仁さん（三）は精神保健福祉士の資格を取得。「資格や学歴は就職に有利なだけでなく、社会に出る時の自信にもなる」と仲間たち呼び掛けている。就職が決まっても困難は付きまとい。依存者の家族でつくる三重家族会の主婦の息子（四）は覚せい剤の常習者だった。薬物をやめ工場に勤めたが後遺症で体調不良に苦しんだ。過去を隠しているのが欠勤理由が話せず、仕事が続かない。受刑者の就職支援では、法務省が事業者雇用を働き掛ける制度がある。しかし元薬物依存者のための特別な制度はなく、龍谷大学大学院の石塚伸一教授（刑事法）は「国の対策が遅れている分野で、社会の受け入れ態勢と併せて改善の必要がある」と指摘。「社会復帰の難しさが、結果として高い再犯率にもつながっている」と警鐘を鳴らす。